

---

## 俺と女王様3 青い海と試練の夏

金本ちはや

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

俺と女王様3 青い海と試練の夏

### 【Nコード】

N3335C

### 【作者名】

金本ちはや

### 【あらすじ】

ようやく迎えた夏休み、俺は友人たちとともに海の家にあるアルバイトにやってきた。問題はひとつ、メンバーのなかに彼女がいること。なぜなら、長年隠してきた俺の想いが彼女にバレってしまったからだ。……最低最悪な形で。まさに俺にとっての、試練の夏がはじまる。……俺とわがままな女王様、変化していくふたりの夏の日々。【09/06/24/一部改訂・作品タイトル変更】

## 1 試練の夏、来りて

夏は、試練の季節。

そんなことを言ったのは、いったいだれだったろうか。今となつては思い出せないが、聞いた瞬間、全力で頷きたいほど納得したことは憶えている。

そう。夏は試練の季節だ。

男にとつて。

「青い空、青い海……そして白い砂浜で微笑む水着のエンジェルたちー！」

ガッツポーズとともに、香坂京平「いひながきまこと」が焦げつくような陽射しにも負けないほど熱い歓声を上げた。その眦まなじりにはつつすらと涙が滲んでいく。

馬鹿だ。

「来た来た来たよ、夏休みー！ 海水浴ー！ おれはこんな熱い日々を待つてたんだあ！」

「遊びにじゃなくてバイトに来ただけだな」

灼熱の太陽に向かって吠える友人に、俺は空気の入っていない浮き輪の束を押しつけた。

「ほら、空気入れて並べてこい。ちゃんと大きき別にだぞ」

「……おい、本原もとほん」

香坂は拳を下ろすと、呪い殺さんばかりの目でこちらを見た。

「お〜ま〜え〜はあっ！ せっかく盛りに盛り上がったテンションを急降下させるようなことをお！」

「事実を言ったまでだろ。もうすぐ昼だから、それまでに終わらせとけよ」

「あーもー、この朴念仁が！ はいはい、わかりましたよ。働きゃいいんだろ、働きゃあ」

「そうそう。あ、ついでにそこにあるビーチボールとかボートもよろしく」

「何気にパシリやがってるな、こんちくしょう！」

「うがー！ つと香坂はしばらく頭を掻きむしっていたが、結局がつくりと頂垂うなだれて浮き輪の束を受け取った。

「ああ……グッバイ、おれのマーメイドたち……」

先ほどまでの暑苦しさが嘘のような、生気の薄い顔でぶつぶつと呟いている。俺はため息をつく、小柄なためにやや低い位置にある香坂の肩を叩いた。

「まあ、元気出せ。接客中にいやっていうほど天使だか人魚だかの水着姿を拝めるし、仕事が終われば声もかけ放題だろ」

「マジでか!？」

たちまち香坂の顔に生気がみなぎる。器用だよなあ、と呆れながら、俺は期待に輝く目に頷いた。

「ああ」

たぶん。

「いよつしゃあ！ そうと来ればじゃんじゃん働いてやるぜー！ 待つてるよ、渚のフェアリーたち！」

鼻息荒く、香坂は再び拳を突き上げる。……こいつ、本当に馬鹿だ。

「元気だなあ、香坂」

屋外の客席用のビーチパラソルを広げていた宮野照史みやのていしが苦笑した。俺は肩を竦めると、もうひとりの友人の許へ向かった。

「いつものことだろ。……なんか手伝うことあるか？」

「いや、これでちょうど終わりだ」

ぱんつと張ったビーチパラソルをテーブルの中央に空いた穴に差し、宮野はひらひらと両手を振った。

「お疲れさん」

「おまえもな。これから昼だっけ？」

「ああ。飯は手が空いてるときに、各自適当に食べるってさ」

「うっわ、マジかよ」

Tシャツの胸元をつまんでばたばたと扇いでいた宮野は、顔をしかめた。

「超いい加減だな」

「まあ、しょうがないだろ。海の家バイトなんて、どこもそんなもんだ」

俺は額に浮かんだ汗を手の甲で拭った。陽光に熱された空気に、体中の水分が蒸発しそうだ。

俺は目を細め、恨めしいくらい見事に晴れ上がった空を仰いだ。まぶしい蒼穹の真ん中で、太陽がきらきらと輝いている。

視線を下ろせば、視界に飛びこんでくるのは果てしなく広がる真夏の海。波頭のきらめく遙か彼方、まっすぐに伸びる水平線の上に朧な船影が見える。砂浜は海水浴客でこった返し、ビーチパラサルや人々の水着の色が目には痛いほど鮮やかだ。

一学期を終え、ようやく迎えた夏休み。俺は友人たちとともに、海の家へアルバイトにやってきていた。期間は一週間。海の家と経営者が同じ民宿で泊まりこみだ。ハードだが、それなりに報酬はいい。

文句はない。あるひとつを除けば。

「そっぴや、神崎たちは？」

ふと宮野の口から飛び出した名前に、思わず心臓が跳ね上がった。

「あ、ああ。店中で片づけしてる」

激しくなりそうになる鼓動を鎮めながら、できるだけ平然と答える。宮野は特に気にするでもなく、「そっか」と呟いた。

俺はこっそりため息を洩らした。

そう、文句はない。ただひとつ 彼女がアルバイトのメンバーに入っているということを除いて。

以前だったら素直に喜べたのだろうが、今はその反対だ。香坂で

はないが、思わず頭を掻きむしりながら唸りたい気分だ。  
なぜなら。

「男子い、そつちは終わったあ？」

ひと際明るい声とともに、店の中からこちらへやってくる姿があった。女子メンバーのひとりである水沢明音と、……彼女だ。

他のメンバーと似たり寄ったりの、白い半袖のパーカーに灰色のショートパンツ、明るい水色のビーチサンダルという出立ち。長い髪はひとつに結び上げられ、不揃いな毛先が頂のあたりで揺れていた。

彼女は平均よりもやや細めの体型をしていて、そのせいか手足がすらりと長く見える。しなやかに伸びた四肢は、思わずハツとするほど白かった。

俺は一瞬彼女に（正確には彼女の肌に）釘づけになり、慌てて目を逸らした。遠慮なく突き刺さってくる鋭い視線を感じる。

睨んでいる。絶対睨んでいる。氷のように冷やかな怒気がひしひしと伝わってくる。

逃げたい。

もうアルバイトなんぞ放り出して、今すぐここから逃亡したい。情けないと笑われようが、それが偽らざる俺の本音だった。

しかし。

現実はその甘くない。事情を知らない友人たちの手前、仕事を押しつけてひとり逃げ帰ることなんてできない。それに、彼女は決して逃げることを許さないだろう。本当なら、アルバイトのメンバーは俺を含めた男子だけだったのに、俺が海の家のアバイトに行くとは聞くなり、わざわざ男子と同数の女子に声をかけて参加したのだから。用意周到というか、身の危険を感じるのは気のせい……ではないはずだ。

そもそもどうしてこんなことになったのかといえば 完全な自業自得だ。

俺は幼なじみである彼女に、まあいわゆる片想いというものをし

ていた。そしてつい最近、俺の気持ちに彼女にバレたのである。  
……寝こみに口づけしようとしたところで彼女が目覚めるといって、  
最低最悪な形で。

それ以来、俺は彼女を避けている。

わかっている。自分でも悲しくなるほどのヘタレだと思う。今までさんざん幼なじみという関係に甘んじていたくせに、勝手に焦って自滅するという、どうしようもない駄目っぷりだ。彼女に非はないのに、まるで自分が被害者のように逃げ回っている。

吐き気がするくらい、俺は臆病で卑怯だ。

それでも。

どうしても、彼女と向き合う勇氣を持ってない。彼女の瞳をまっすぐに見ることができない。

そしてついに、彼女が動き出した。

逃げられない。

だったら。

「はじめ」

驚くほど近くで響いた彼女の声に、俺は思わず息を呑んだ。

「えっ、な……」

「なあにぼさつとしてんのよ。さっきの話聞いてなかったの？ あたとあんたは売り歩き！ ほら、行くわよ」

彼女はじとりと大きな目を半眼にすると、俺の腕を両手でしっかりと掴んだ。俺よりずっと握力は弱いはずなのに、俺は彼女を振り払うことができず、そのまま引きずられるように歩き出した。

「おい、ちよっ……苑香！」

「今日ものすっごく暑いんだから。さっさと売って戻るわよ」

どンドン先に行く彼女は俺の言葉を遮るようにまくしたてると、ちらりとこちらを一瞥した。逸らすこともできず、深みのある瞳とまともなぶつかる。

その瞬間。

彼女はすうっと目を細め、うっすらと、けれど確かに笑った。ま

なざしの奥に氷片を秘めたような、獲物を追いつめる獰猛な獣を思わせる笑み。

逃がさないわよと、とびきり甘く、毒々しい声でささやかれた気がした。

今は激しく太陽が燃え盛る季節だというのに、背筋を寒気が駆け抜ける。

俺に残された選択肢は、彼女に捕えられること、ただひとつ。俺の、短くて長い、試練の夏がはじまるうとしていた。

## 2 少年たちの夜

長い、本当に長い一日を終えて。

宿泊先の民宿に戻った俺たちは、風呂で汗を流し、素朴ながらも海の幸がふんだんに使われた夕食を堪能したあと、早々に男女別にあてがわれた部屋へ引っこんだ。明日に備えて、あとは寝るだけである。夜更かしできるほどの元気は残っていないかった。

俺としては非常にありがたかった。彼女と一緒にいるのは、泣きたくなるほどいたたまれなかったのだ。せつかくの夕食も味わうどころではなかった。部屋へ戻るとき、振り向いたら瞬殺されそうな視線に背中を抉られたような 気のせいではないだろう。正直、明日が怖い。

「も、もう駄目だ……」

部屋に着くなり、香坂は精も根も<sup>かす</sup>滓が残らないほど搾り取られたような声で呟くと、そのまま畳の上にくずおれた。

「おい香坂、寝るなら自分の布団敷いてから寝ろよ」

俯せのまま動こうとしない体を爪先でつつくと、死んだ魚のように虚ろな目が見上げてくる。

「……無理、絶対無理。今そんな重労働したら、おれ死んじゃう」「まったく重労働じゃねえし、布団敷くだけで死ぬようなやつがいるか」

「いーるーのお！ ここにいーるーのお！ なんなのおまえ、そんなにおれを過労死させたいわけ!?」

「だから過労死するわけねえだろ！ 駄々こねてねえで、さっさと起きろ！」

「本原の鬼い！ サド！ 友人虐待で訴えてやるう！」

「そんな虐待の分類あるかつ！」

本気で泣き叫ぶ香坂。小学五年生の彼女の弟だって、こんな馬鹿らしいというか阿保らしい醜態は見せないぞ……？

「なんだあ、どうした?」

自分の布団を敷き終えた宮野がやってくると、すかさず香坂が泣きつく。

「宮野おっ、ヘルプミー! 本原がいじめるんですけど!」

「そうなのか? 駄目だろ、本原」

「いや、明らかにいじめてねえし。こいつが布団敷かねえって駄々こねてんだよ」

俺の反論に、宮野は腕を組んだ。

野球部でキャッチャーを務める宮野は、香坂とは対照的に大柄で実年齢よりも老けて見られやすく、こういう親父くさい仕種がよく似合う。

「まあ、かなり仕事きつかったしな。宮野は文化部だし、へろへろになってもしょうがねえだろ。俺が代わりに敷いてやるよ」

「マジで!? やったあ、さっすが宮野! 頼れるみんなの兄貴!」  
俺は思わずよろめきそうになった。

「おいこら待て、宮野。甘やかすな! こいつはおまえの弟じゃなくて同級生なんだぞ!」

「まあ似たようなもんだろ」

「似てねえよ! しかも香坂のほうが誕生日早かったじゃねえか!」  
「そんな細かいこと気にすんなって」

あっはっはと豪快に笑う友人に、俺はこめかみに痛みを覚えた。

というか、たかが布団を敷く敷かないということに何を大騒ぎしているのだろう……。

虚しさに黄昏れていると、どこかのんびりとした声がかかった。

「僕も本原の意見に賛成かなあ」

部屋の隅を陣取るように敷かれた布団の上に胡座をかき、文庫本を読んでいた長谷悠也が顔を上げて、にっこりと笑った。

「ほら、テレビの子育て特集とかで、甘やかしすぎると将来自立できなくなるっていうじゃない。優しさも大切だけど、敢えて厳しく突き放すのも愛だと思っよ? 『飴と鞭』って言葉もあるしね」

正論だが、ところどころにツッコみたい箇所があるのはわざとに違いない。しかし期待に添えるだけの余力はなかったので、俺は黙っていた。

長谷の言葉に宮野は目を瞬かせると、ふむ、ともう一度思索した。「言われてみればそうかもな……うん、そうだな。手を出したくても我慢して見守ることも大事だよな」

「ええ！ ちよっ、そんなあっさり!？」

驚愕に目を剥いた香坂の肩を叩き、宮野は父性溢れる笑みを浮かべた。

「がんばれ、香坂。俺はおまえならやり遂げるって信じてるぞ！」

「……………マジっすか」

いつの間にかスポ根漫画のワンシーンのようなやりとりをしているふたりからそくさと離れ、俺は自分のスペースに布団を敷きはじめた。実は長谷の隣だったりする。

「さっきの、本原なら冴え渡るツッコミを入れてくれると思ったんだけどなあ」

つまらなそうな視線を向けてきた友人を、俺は力なく睨み返した。

「いちいち確信犯的なボケにまでつき合ってられっか……」

「友人甲斐のないやつだなあ」

くすくすと心底おかしそうに笑われても真剣味がない。

俺は黙々と布団を敷き終え、待望のシーツの海にダイブした。優しく体を受け止めてくれるやわらかい感覚に、全身の筋肉が一瞬でゆるむ。

「うお……なんかもう天国だ……」

心地よい眠りに引きこまれた意識を、しかし笑みを含んだ長谷の声が容赦なく掬い上げた。

「だいぶお疲れみたいだねえ。まあ、あれだけ殺気をビシバシ飛ばされれば神経もすり減るよねえ」

頭から冷水をかけられたようだった。

かばつと顔を上げると、爽やかでありながら腹黒さを感じずには

いられない笑顔の長谷と目が合った。

「で、神崎女史と何があったの？」

肌の白さとは対照的な黒い前髪の奥から、同色の双眸が見つめてくる。心の奥底まで見透かされそうなまなざしは、彼の恋人のものとよく似ている。

「おかしいなあとは思ってたんだよねえ。最初は僕らだけで来るはずだったのに、突然神崎女史たちもだなんて。まあ、果林かりんと一緒にいられるから不満なんてないんだけどさ」

さりげなくのろけながら、長谷はじわじわと追い詰めてくる。瞳孔と虹彩の区別がつかない瞳をよぎるのは、愉悦の光。

絶対おもちゃにされている……。

憤りたいような嘆きたいような、なんとも微妙な心境になり、俺は押し黙った。今更ああだこうだと騒いだところで、長谷の性格が変わるわけではない。用意周到に張りめぐらされた蜘蛛の巣のごとく、この友人から逃げることなど不可能なのだ。おとなしく糸に巻かれ、妥協しながらつき合っていくしかない。

人生、あきらめが肝心である。

俺は、深く長く重いため息を吐き出した。

まったく、彼女といい友人たちといい、どうしてこう俺の周囲には灰汁あくの強い人間が多いのか。そしてなぜ、俺はそんな彼らとつき合っているのだろうか。

類は友を呼ぶ？ いやいや、俺は平々凡々な一般人だ。そのはずだ。

後ろのほうでは、宮野と香坂がまだスポ根漫画を演じているようだった。

「無理だ……っ、おれには無理なんだ！」

「逃げるな！ つらくても苦しくても、勝利はその先にしかないんだ！」

俺の本当の休息は、まだまだ先のようだった。

### 3 先手、女王様

女はこわい。

怖いし、強い。

ということを、俺は痛烈に実感していた。

昨日に続いて本日も快晴、絶好の海水浴日和だ。つまり、海の家にとつては他でもない稼ぎ時。少しでもたくさんのお客を呼びこもうと、まぶしい陽射しの照りつける砂浜では熾烈な戦いがくり広げられていた。

別名、女の意地と矜持のぶつかり合い。

「ねえねえ、そこのお兄さんたちい。ちよつと寄つてかなあい？」

「うちのお店に来てよっ、他よりもっといいサーブスあるからさ！」  
弾むような声を上げているのは、色とりどりの水着を身に纏った少女たち。輝くような夏空の下、惜しげもなく晒された瑞々しい肌  
に、行き交う海水浴客（特に若い男）が目を奪われている。

砂浜に軒を連ねる海の家は決して少なくない。それはそのまま、  
客引きの人数に比例する。大して広くない縄張りの限られた範囲の  
中、少女たちは凄味さえ感じられるような勢いで声を張り上げ、笑  
顔を振り撒いていた。縄張りの重なる境界線の周辺は気温が鰻のほ  
りだ。正直少し……いや、かなり近寄りがたい。

俺たちが働く海の家も、例に漏れず参戦中だ。他のアルバイトの  
女の子とともに、俺の同級生たち もちろん、彼女も。

「休憩ならどうぞこちらへ！。シャワー・更衣室、完備してまーす」  
昨日と同じポニーテールにまとめられた髪。線の細い肢体を包む  
のは、淡いブルーの。

……………どうしてビキニなんだよッ！

俺は思わず悶絶したくなった。よりもよつて、ビキニ。

まだショートパンツタイプだからマシなのかもしれないが、はた  
してそれがいったいなんのフォーローになるといのか。その威力は

核爆発にも等しいといわれる海辺の最終兵器だ。

「どうしたの、本原。今にも悶え死にしそうな顔して」

一緒に貸出し用のボートを壁に立てかけていた長谷が、不思議そうに目を瞬かせた。俺の視線の先を追いかけ、ああ、と納得したように呟く。

「さすがだねえ、神崎女史。道行く男たちの目が釘づけだよ。あんまり気づいてないみたいだけど」

長谷の言とおおり、彼女はかなり注目的になっていた。本人にはその自覚があるようでいて、実のところあまりない。

「……たち悪すぎだろ」

俺の呻きに、長谷の含み笑いが重なった。

「自業自得じゃない？ あれは彼女なりの、きみへの『挑発』なんだろうし」

鋭い指摘に、俺はぐつと言葉を詰まらせた。

昨夜の悪夢が甦る。言葉の拷問によって、彼女がアルバイトに急遽参加した経緯を吐かされたのだ。俺の自白を聞き終えた長谷の第一声は、「本原って本当にヘタレだねえ」だった。余計なお世話だ。そつと彼女に視線を戻す。惚れた欲目を入れたとしても 悔しいほどに、似合っていた。

……頭が沸騰しそうだ。めまいが起こりそうなほどの熱を、途端に意識する。

火を吹きそうな顔を押さえながら視線を逸らすと、生ぬるい笑みを浮かべる長谷と目が合った。

「……なんだよ」

「いやあ、初々しいっていうか純情っていうか……本原ってかわいいよねえ」

嘆息するような声音に鳥肌が立った。

「なっ、何気持ち悪いこといってんだよ！」

「失礼だなあ、褒めたんだよ？ 別に変な意味はないしね。なんて言つか、傍から見ると思わず顔がにやけちゃうような……こご甘

酸っぱさが、ね」

「ね、じゃねえよ。つまり俺の懊悩を見て楽しんでるってことだろうが」

「いやだなあ。草葉の陰からそつと見守ってるって言うてよ」

「おまえまだびんぴんに生きてるだろ!？」

ああもう、なぜこの友人との会話はこんなにも疲れるのだろう。

げっそりとした気分のため息をつくとき、不意に長谷が表情を改めた。

心の最奥を隠すベールを容赦なく切り裂いてしまいそうな鋭いまなざしに、心臓が震え上がる。

「でもさ、本原。いつたいいつまで逃げ続けるの?」

いつもと変わらない、だが氷の刃のような声がざっくりと胸を抉った。

こういうときの長谷は、本当に冷酷だ。たとえ相手がだれであろうと決して手を抜かない。

真っ黒なガラス玉を思わせる瞳から目を逸らすことも、何か言い返すこともできなかった。

「逃げて逃げて逃げて　ずっとそのままでしたら、いつか追いかけてもらえなくなるよ?」

ツイ、と長谷の視線が動く。

透明な糸に引つ張られるように、同じ方向へ振り返る。瞳がたどり着いた先の光景に、喉の奥から叫びがせり上がってきた。

唇を噛みしめ、必死に抑えこむ。

彼女が　笑っていた。

その隣にいるのは、見覚えのない若い男。おそらく大学生ぐらいだろう。さっぱりとした黒髪、癖のない顔立ち。親しげでありながら粘着質なしつこさを感じさせない笑顔を、他でもない彼女に向けている。

ナンパというにはいやらしさのない、爽やかな空気がふたりを包んでいた。

胸の奥がじりじりと焦げつく。肺を満たしていくきなくささに、俺は喘ぐように息を洩らした。

あんなにも無防備な彼女が放っておかれるはずがない。わかっていた、つもりだった。

つもりだけで、ちっとも理解していなかった。

あのととき。眠る彼女を前に抱いた焦燥よりも、もっと荒々しい感情が咆哮を上げる。

食い入るような俺の視線に気づいたのか、ふと彼女の目がこちらを向いた。

小さく瞳られる瞳。そして。

白と黒に彩られた盤上に、彼女が先の一手を打つ音が聞こえた気がした。

試練は、<sup>ゲーム</sup>すでにはじまっていた。

#### 4 想いはもつれ絡まりて

自分に耳があることをこんなにも苦痛に感じたのは、生まれてはじめてだ。

あるいは、だれかの口を二度と開かないようにしてやりたいと思っただのも。

「それでそれで？　なんていうんだって？」

彼女の隣に座った水沢が、興奮した様子で身を乗り出した。短く切り揃えたショートヘアに、こんがり和小麦色に灼けた肌。男の子めいた外見に似合わず、この手の話が大好物だ。

「高見沢さん。K大の二年生だって」

いささか鼻息の荒い水沢に対して、彼女は落ち着いている……というか、まるで他人事のように素っ気なかった。

「K大！？　超頭いいとこじゃん！　さっすが苑ちゃん、捕まえる魚も大物だあつ」

「顔もなかなかカッコよかったよね。チャラチャラしてなくて、感じのよさそうな人だった」

水沢の向かい側で、松下果林がふんわりと微笑む。たとえるなら綿菓子やマシユマロのような、気が抜けるほどやわらかい笑顔。だがどんな修羅場でも同じ表情を浮かべられるのだから、おそろしいことこのうえない。その視線が一瞬こちらに動いたことに気づき、俺は無理やり青汁を飲まされた気分になった。

「だけど女慣れしてそうじゃなかったか？　ああいうタイプは結構遊んでると思うぞ」

松下の隣で頬杖をつき、聞き役に徹していた丈部藍たけべ あいが涼しげな眉間を曇らせた。途端に斜向かいから反論が上がる。

「んもー、わかってないなあ藍ちゃん！　逆にそこがいいんだよ。格好ばっかりつけたがって中身がない男よりずうっとマシ！」

「遊び人もどうかと思うが……」

女三人寄れば姦かしましいとはうまく言ったものだが、こちらは四人なうえにひとりでふたり分しゃべりまくる水沢がいるので、一種の騒音と化していた。女という生きものの辞書に、沈黙の二文字はないのだろうか。

「まあまあ、選ぶのは苑ちゃんだし。で、苑ちゃんはどつするの？」

「明日一緒に出かけないかって訊かれた」

「おおー、いきなりデートですか！」

「……毎度のことだが、明音。ちよつとテンションを下げろ」

「藍ちゃんが低すぎるんですう！ ねっ、果林？」

「わたしに同意を求められても困るなあ」

「ひどい！ 何気にひどい！」

「……ないのだろうな。」

俺は深々とため息をついた。向かい側の宮野は苦笑を滲ませ、その隣では長谷が悠々と読書に耽っている。嫌味さえ感じる余裕っぷりだ。

夕食が終わっているからいいものの、食事中までこれだったら心底うんざりしただろう。ハードな仕事に慣れてきたからか、隣のテーブルの面々は俺たち以上に元気があり余っているようだった。

「…………… ああ〜っ、もー、うるせええッ！」

俺の隣でテーブルに突っ伏していた香坂が、唐突に吠えた。椅子を蹴倒す勢いで立ち上がると、充血気味の目でギツと女子を水沢を睨みつけた。

「人が珍しく感傷に浸ってるつてのに雰囲気ぶち壊しやがって……」

特にそこ！ おまえうぜえんだよ、ハイテンション女！」

「なんですってえ！？ あんたに言われたくないわよ、童顔女顔！」  
指差された水沢も、がたたんつと椅子を鳴らしながら立ち上がる。激しい火花を散らしながら睨み合うふたり。いつものことだ。

「別におまえが声かけられたわけじゃねえだろうが！ 自分のことみたいに騒いでんじゃねえよ、恥っずかしいやつ！」

「あんたこそ八つ当たりしてんじゃないわよ！ センチメンタルぶ

って、ナンパがうまくいかなかっただけじゃない。馬っ鹿みたい！」「な、なんでおまえ知ってただよ！」

「あんたのやつてることなんて脳味噌使わなかったってわかるわよ、この単細胞！」

女子のおしゃべり以上のやかましさに、俺はため息をつく気力すらなくなった。ぎゃいぎゃいと小学生レベルの口喧嘩をくり広げる彼らは、本当に俺と同じ年なのだろうか。

つき合っていていられるか。

今この瞬間が、くだらないと言う価値もないほどくだらない時間に思え、俺は椅子を引いた。口論に熱中している香坂たち以外の視線が集まる。

「本原？」

宮野が不思議そうに瞬きをした。長谷は文庫本から顔を上げ、うつそりと目を細めた。

「……先、部屋戻るわ」

すべてを見透かしているだろう友人のまなざしさえ煩わしかった。俺は宮野の返事を待たずに、さっさと部屋をあとにする。

腹の底でぐらぐらと感情が煮え立っているのに、それを冷ややかに見下ろしている自分がいた。だれかを傷つけてしまいたいような苛立ちと、もうどうにでもなれと呟く疲労感がずっしりと胸の内を詰まらせていた。

もう何も聞きたくなかった。耳を塞いで、喉を切り取ってやりたかった。

そう考えることすら馬鹿馬鹿しいと笑ってしまいたかった。

だから、いやというほど聞き慣れた足音が追いかけてきたとき、俺はいつそ彼女を殺してしまおうかと思った。

「はじめ」

いつになく平坦な声に、心はいっそう荒み、冷たくなっていく。少しでもはしゃいだ素振りを見せたりすれば、こんなに苦しくなかったのに。

「……なんだよ」

振り返ると、彼女は無表情だった。色の深い双眸を細め、どうしよつかとひとりごちる。

「どうすればいいと思う？」

あくまで淡々と。だがその裏に隠された計算高い期待に、本気で彼女を殺したくなった。

最低最悪な女だ。

どうしてこんなやつを好きになってしまったんだろうと思いつながら、俺は答えた。

「別に」

たとえば。

ここで行くなと言えば、きっと試練はあっけなく終了しただろう。彼女の勝利という形で。

そんなのごめんだ。

追い詰められた俺の思考は麻痺していた。

「行きたかったら、行けばいいんじゃないかねえの。俺には関係ねえし」  
きつと後悔するに決まっている。

それでも、このときの俺は、放り出して逃げることを選んだ。  
敵の思いどおりになるなんてまっぴらだった。

「……あつ、そう」

彼女の声音がすつと低くなる。憤りと落胆がない混ぜになった、詰るような色が見つめてくる瞳に一瞬浮かんだ。

俺はそれを投げやりに受け止めた。

試合は、混戦へ突入しようとしていた。

## 5 結び目をほどくとき

覆水盆に返らず。こぼれ落ちた水のように、一度失われたものは決して元に戻らない。

その事実には思い至ったとき、俺は壁に頭突きをかましたくなつた。「女子のおしゃべり攻撃に煽られてイライラしまくった結果、自棄やけになってせつかくの降伏の機会を逃した」と

テーブルの向こうで頬杖をついた長谷は、呆れを通り越して哀れむようなまなざしを向けてきた。

「なんていうか……本原って」

「頼むから言わないでくれ。そしてそんな目で見ないでくれ」

この世から消えてなくなりたい気分とは、こんな感じだろうか。俺は額をテーブルにくつつけながら考えた。

ひと晩経って、頭が熱いような冷めているようなおかしい状態が落ち着いた途端、俺は昨夜の自分の行動に沈没した。

後悔なんてものではない。もしもタイムマシンに乗れるなら、三回回ってワンと吠えたっていい。ド えもおん！ ……なんていう現実逃避に走れないほど、リアアナ海溝よりも深く落ちこんだ。

昼時のラッシュを過ぎ、海の家は東の間の平穏を味わっていた。俺と長谷は、宮野や香坂と交代して休憩に入り、店の隅で遅い昼食をとっていた。

「まあ、女子もちょっとやりすぎたかもねえ。あれは素で楽しんでたし」

「特におまえのカノジョとかな……」

松下経由の長谷の情報によると、昨夜の女子のおしゃべりは、彼女の依頼による俺への精神攻撃あてつけだったらしい。道理で妙なしつこさを感じたわけだ……。

「果林のいいところは、いつでもどこでも自然体でいられるところだよ？」

「さりげなくのろけてんじゃねえよ。時と場合によるだろうが。少しはTPOをわきまえる！」

「大丈夫。なぜか僕らがわきまえる前に、周りが僕らに合わせるくれるから」

「……おまえらつて、ホント似た者カップルだよな」

「そう？ 嬉しいなあ」

「褒めてねえよ！」

ああ、もう。こんなときにもツツコまずにはいられない自分の性が悲しい。

再びテーブルに沈みかけた俺を、ほんの少し口調の変わった長谷谷の声が引つ張り上げた。

「でもさ、本原たちも充分似た者同士だよな」

あの心臓の裏まで射抜くような目とかち合う。

「……どこが」

「意地っ張り」

ふふ、と長谷は吐息のような笑い声を洩らした。

「きみも神崎女史も、相当な意地っ張りだよな。負けず嫌いっていうか、傍から見るとこっちが苛つくぐらい頑なになってる」

柔らかな笑顔で吐かれた台詞は、長谷のひんやりとした怒りを滲ませていた。

「何をそこまで抵抗するの？ さっさと捕まってくっつけばいいのに。今はまだ笑って傍観してられるけど、そのうちみんな怒り出すよ？」

もう怒ってるじゃねえか、とは言えず、俺は口をつぐんだ。不機嫌な長谷に凶星を指すのは、火に油を注ぐことに等しい。ごまかすように焼きそばをつつくしかなかった。

「今日だって、そんなに落ちこむくらいなら止めればよかったのに」  
そう。

勝手にすればいいという俺の答えどおり、彼女は例の大学生と出かけていた。休憩に入るや否や、あの水着姿のまま。すれ違い様

に向けられた視線は、絶対零度を下回っていた。

「神崎女史もムキになって、ちよつとあれは危ないよねえ。どうするの?」

「……わかんねえ」

俺は箸を紙皿に置き、拳を握りしめた。

「どうすればいいか、わかんねえんだ。追いかけられると逃げたくなるし、追いかけてもらえなくなるって考えたら、怖い。だれかに持ってかれるなんて我慢できねえ。……だけど」

「手に入れられるかも、なんて考えられない?」

大袈裟なくらい喉が鳴った。

「本原はさ、最初からあきらめて ううん、満足してたよね。神崎女史のことが好きでも、追いかけてはなかった。だって隣にいられたんだから、そんな必要なかったんだ」

でも、と長谷は続けた。

「それは幼なじみっていう前提があつたからこそで、崩れてようやくきみは焦り出した。それでまあ、あんな失態をしちゃったわけだけど」

「……笑うなよ」

「ごめんごめん。それで逃げ出して、ところがどっこい相手は避けるところか追いかけてきた。自分の完全な片想い、神崎女史にとつて自分は幼なじみでしかないと思つてたきみには、まさに寝耳に水、鳩に豆鉄砲だったわけだ」

何か少し違わないだろうか?

俺の微かな違和感を置き去りにして、長谷はさらりと、まるで明日の天気でも話すかのように最終宣告を下した。

「つまり 本原は、神崎女史の気持ちを信じられないんだろう?」

絶句、というものを俺ははじめて体験した。

俺が、彼女の想いを。彼女を。

信じられない?

「本原にとって、両想いなんて絶対ありえないことだから信じられ

ないんだ。きみは神崎女史の隣にいたいけど、彼女の気持ちを信じられない矛盾を抱えて苦しい。これからもふたりが一緒にいるためには、恋人っていう関係じゃなきゃいけないから」

長谷は凧いだ水面のような表情で頼杖を外し、組んだ両手を口元に当てた。

……俺は。

俺にとって彼女は、だれよりも近くにいてほしいと望む存在だ。

少しでもたくさん時間を共有したい。笑顔も涙も、すべて知りたい。知ってほしい。

裏切りだとか不快感だとか、そういう次元からこの世で一番遠いはずの彼女を、俺が。

俺が、信じられない、なんて。

「そんなの……最低だ」

こぼれ落ちた眩きは、今にも消えそうなほど震えていた。

何が最低最悪の女だ。

俺が、俺こそが最低最悪の男だ。

吐き気がした。

嘘だと笑い飛ばせばせたらどんなにいいだろう。だが長谷の言葉はどこまでも真実で、俺は打ちのめされるしかなかった。

死ねばいい。

死んでしまえばいい、俺なんて。

闇のような絶望に囚われかけた思考を、ふっと、長谷の声が掬い上げた。

「……所詮部外者の僕が判断すべきじゃないけど」

彼の顔は厳しく、けれど 優しくかった。

「まだ間に合うなら、きみは最低にはならないと思う」

長谷は本当に容赦がない。相手がどんなに弱っていようと、躊躇なく鋭い真実の刃を突き立てる。逃げるな、目を逸らすなど。

それが相手を思っているからこそその行いだと、俺は知っている。

世渡り上手のようできて、本当はとても不器用なこの友人の心根を、知っている。

「全部は本原と神崎女史次第だ。ねえ、本原」  
もつれて絡まり合った糸を、その固い結び目をそっとほどくように。

静かな声は、するりと俺の心に染みこんでいく。

「きみは、どうしたい？」

どうすべきかではなく、どうしたいか。

俺は。

俺は。

## 6 きみのとなりへ

泣いている女の子がいた。

さびしいと、ひとりぼっちはいやだと、泣いている女の子がいた。

泣かないで……

俺がしてやれたのは、彼女の隣に並んで俯いた頭を撫でながら、必死に慰めることだけだった。

おれがそばににいるから。ずっとずっと、一緒にいるから

彼女の涙なんて見たくなかった。

いつだって、笑っていてほしかった。

だから、約束をした。

傲慢な思いこみかもしれないけれど、俺の隣にいる彼女は、どんなときも笑顔で、楽しそうに。幸せそうだったから。

そばにいます。ずっと一緒だと。大人になろうとじいさんばあさんになろうと、決して離れないと。

約束を、した。

俺が、彼女の隣にいたかったから。

「ねえ、苑ちゃん見なかったっ？」

どこか焦っているような水沢の声に、俺は思わず振り返った。

「どうしたの？」

不安に追い立てられたような表情で駆けこんできた友人に、松下はテーブルを拭く手を止めた。店じまいの準備をはじめていた仲間たちの視線が、自然とふたりに集まる。

「お昼休みに出かけたつきり帰ってこないの！ もう夕方なのに……」

一瞬、呼吸が止まった。松下は眉をひそめる。

「一度も帰ってきてないの？」

「うん。交代の時間までには戻ってきてるって言ったのに……苑ちゃんに限って、おかしいよね!？」

「ケータイは？」

長谷の冷静な指摘に、水沢は首を横に振った。

「つながんないの。何度かけても 電源、切れてるみたいで」

「おいおい、それって……」

声を上げかけた香坂は、何かに気づいたように口をつぐんだ。その隣で、宮野が腕を組んで唸る。

「神崎、だれかと一緒に出かけたんだよな？」

「昨日ナンパしてきた大学生とね」

松下は呟くように答えると、両手を固く握りしめている水沢の肩にそつと手を置いた。

「いつ気づいたの？」

「一、二時間ぐらい前。さすがに遅いと思って、でもケータイもつながなくなかって……藍ちゃんと一緒に探したんだけど、全然見つからないの!」

水沢は唇を震わせると、崩れ落ちるようにしゃがみこんだ。

「どうしよう。苑ちゃんに何かあったらっ……」

「あっちゃん、落ち着いて」

松下は膝を折ると、水沢の背を優しく撫でた。そこへ勢いよく丈部が飛びこんでくる。

「丈部、神崎は？」

「いや……」

尋ねる宮野に、丈部は息を整えながら言葉を濁らせた。水沢は顔を歪ませ、深く項垂れた。

「それより、いやな噂を聞いた」

「噂？」

「ああ。別の海の家の店員が言ってたんだが、あの高見沢っていう大学生、ここらじゃあまり芳しくない評判で有名ならしい。見かけに

似合わず、毎年何人も女を引っかけては遊んで捨ててるそうだし、すつつと腹の底が冷えるような感覚を覚えた。おまけに、と文部が苦い口調で続ける。

「仲間がいるらしい。そいつらも似たり寄つたりの連中だそうだし、吐息まで凍りつきそうだった。」

ざわざわと頂が粟立つ。寒気を感じているというのに、握りこんだ掌の内側がじつとりと湿っている。

彼女は今、どこにいる？

最後に交わした、冷たいまなざしがフラッシュバックする。次いで、彼女に親しげに話しかけていた男の笑顔が。

彼女を手放したのはだれだ？ 好きにすればいいだなんて言ったのは、大切なものを見誤ったのは。

俺だ。

だから、俺の隣に彼女はいない。

だから、彼女がいるのは。

俺ではない、俺以外のだれかの隣。

脳裏で、白い光が爆ぜた。

「……………本原！？」

驚きに染まつた香坂の声が聞こえたときには、もう走り出していた。蹴るたびに舞い上がる砂は熱を失い、あたりは夕闇に吞まれつつあった。どこへ行けばいいのかなんて思いつかず、ただ心の叫ぶままに足を動かした。昼の賑わいが嘘のように人の声は途絶え、自分の荒い息だけが耳を掠めていく。

後悔か怒りか嫉妬か、それとも他の感情か。爆発するように噴き出すものにどんな名前をつければいいのか、わからなかった。

ただ、ただ、彼女がいないという事実が許せなかった。俺の隣ではなく、他人の隣にすることが我慢ならなかった。俺の隣で

俺以外のだれかが彼女に触れることも、笑わせることも、怒らせ

ることも、泣かせることも、傷つけることさえ認められなかった。笑うがいい。俺は馬鹿だ。とことん追い詰められなければわからないような大馬鹿者だ。

勝負に負けることがなんだ。雀の涙のような男のプライドを踏みにじられても、俺には譲れないものがあるのだ。

俺は、彼女が好きだ。

腐れ縁よりもたちが悪い幼なじみが。どうしようもなくわがままで自己中心的な女王様が。

守れるかどうかわからない約束に、心の底から嬉しげに笑った女の子が。

神崎苑香が。

好きだ。

ただひとりの女として想う。これからの人生すべてを捧げててもかまわない。欲しい。手に入れたい。

好きだ。

好きだよ、苑香。

おまえのことが、だれよりも。

好きに決まっている。

手遅れかどうかなんてわからない。間に合わないかもしれない。だからどうした。

奪わないでどうする。取り戻さないでどうする。

女王様の思惑も、友人たちのお節介な親切心も関係ない。俺が望むから、だからこそ。

覚醒しきつた獣が吠え猛る。荒々しい響きは身の内を駆けめぐり、俺はひたすら残照に染まる砂浜を疾走した。

## 7 光の迷い路、その先に

空が夜の色へ塗り替えられると、海辺の街はまばゆい光を纏いはじめた。目を刺すような光の波のなかを泳いでいく人々は、どこことなく浮き立っている。

きつと傍から見た俺は、ひとり場違いな表情をしているに違いなし。ほとんど通行人を押しよけるようにして雑踏のなかを突き進む後方から上がる非難の声にもかまう暇もなく、街を彩る光のなかにある文字を求めて絶え間なく視線をめぐらせていた。

薄闇に漂うネオンライトの多くは、飲食店や土産物屋、ゲームセンターなどの娯楽施設の看板だ。おそらくは海水浴客を目当てにしたそれらのどこかに、カラオケボックスのものもあるはずだった。

男がナンパした女の子を連れこむような場所。携帯電話がつかない場所。大人数で、何時間居座っても怪しまれない場所。何が起こっても、だれにもわからない場所。

真っ先に思い浮かんだのが、カラオケボックスだった。

長年彼女に片想いしていたとはいえ、俺にだってナンパの経験くらいはある。そういうことに対してすこぶる熱心な香坂に引きずられてというか乗せられてというか、まあ興味がないわけでもなかった。

そんなとき、じゃあとりあえずどっか行こうかと向かった先がカラオケボックスだった。初対面の相手とも適当に時間が潰せ、なおかつ財布に余裕があるとは限らない高校生にも手軽な料金。おまけにこちらから呼ばない限り、だれかに邪魔される可能性も低い。

そう、カラオケボックスは個室が基本だ。商売柄、防音設備も整っている。たとえ大声で助けを呼んだとしても、溢れ返る音の洪水に掻き消され、他の部屋にいる客の耳に届くことは難しい。

腹の底からどす黒い何かがせり上がってきた。思考は冷え冷えと冴え渡り、凍りついた水面のように静かだった。

感情はとつくに沸点を通りすぎ、急激に温度を低下させていた。それでいて、今なら簡単に人を殺せそうな衝動が渦巻いている。

「本原！」

流れていく人の波の向こうから、焦ったように俺を呼ぶ声が聞こえた。振り返ると、見慣れた長身が人混みを掻き分けて近づいてくる。

「いきなりひとりで飛び出すなよ！ みんなで手分けしたほうが…

…」

宮野は息を整えながら言いかけた言葉を、驚いたような顔で呑みこんだ。

「……本原」

「なんだよ」

「おまえ、……ごめん。やっぱりなんでもない」

珍しく宮野が口をつぐむ。困惑と心配がない混ぜになったまなざしが、窺うように見つめてきた。

「その、大丈夫か？」

俺は宮野から視線を逸らした。

「別に それより、他のやつらは？」

「女子は海の家で待機中。香坂と長谷は、街の向こう側を探してくるって」

「そっか」

ゆるめていた歩みを再び速めると、宮野が隣に並んだ。器用に人を避けながらついてくる。

「おまえ、どこ行くんだ？」

「カラオケ」

「は？」

俺はからかうように舞い踊る光の群むれを睨んだまま、答えた。

「カラオケなら女連れこんでもおかしくないし、密室を作りやすい。声も聞かれにくいだろ？ 確証はないけど、思いついたからには行ってみる」

「長谷もおんなじこと言ってたぞ。文部たちは街のほうまでは探してないって。ただ、向こうが車だったら……」

「そのときはそのときだ」

考えれば考えるほど、希望も絶望も生まれてくる。それでも立ち止まるわけには、あきらめるわけにはいかなかった。

「どうすんだ？」

「追いかける」

きっぱりと断言すると、宮野は沈黙した。しばらくして、ため息をつくように呟く。

「……なんか気が抜けるなあ」

「なんで」

「だってあの長谷がかりかりするほど焦れつつあったくせに、自覚した途端これだろ。なんか肩透かし食らった気分つつうか……まあ、いいことなだけどさ」

苦笑の気配につられ、俺は宮野を見上げた。だいぶ高い位置にある優しい目を更に和ませ、彼は笑っていた。

「おまえって、神崎のことだけじゃなくていろんなことに対して一歩引いてるだろ。自己主張しないつつうか、結構他人を優先してるよな」

俺は口を挟まなかった。挟んではいけないような気がした。

「それはおまえのいいとこなんだろうけどさ。手を伸ばせば届くもんなまで見過ごしてんのは、かなり歯痒かったな。だからこうやっておまえから動き出して、ちよつと安心した」

そんなことを言う宮野の顔が本当にほっとしたようなものだったから、俺はなんの言葉も返せず前に向き直るしかなかった。

どうしてこうも俺の周りにはお人好しばかりいるのだろう。ふざけているようできて、その根底にある思いは限りなく真摯だ。

馬鹿にすることは簡単で、だが気づかずに裏切っていたら、きつと悔やんでも悔やみきれなかった。

「だから、今度こそきつちり奪い返してこいよ。逃げるなんてナシ

だからな」

「……ああ」

背を叩く力強い掌に、俺ははつきりと頷いた。決意と覚悟を拳の中に握りこむ。

そして何気なく視線を向けた先に、俺は探し求めていたものを見つけた。あまりにも唐突な、あっけない発見に、思わず自分の目を疑う。

「あ、あそこ！」

遅れて宮野も気づいたらしい。それが見間違いではない何よりの証拠だと理解した瞬間、俺は地面を蹴っていた。

だれかとすれ違ったびに体当たりするような勢いで、ひたすらカラオケボックスの看板目指して突進する。宮野とともに人混みを抜けると、薄汚れたガラスのドアを押し開いた。

「いらつしゃ……って、うわ！」

入ってすぐ目の前にあるカウンターでにこやかに出迎えた店員が、ぎょっとしたように身を退いた。それにかまうことなく、俺はまきし立てるように尋ねた。

「女連れで入った大学生ぐらいの男いませんか？ ポニーテールの水色のビキニ着た女の子と一緒になんですけど」

「え、あ……ええっと、確かご来店されたかと」

「何号室ですか！？」

「へっ？ あの、二階の二五号室……っちょ、お客さん！」

すぐに階段に向かい、一気に駆け上がる。慌てたように店員が喚いていたが、何を言っているのか耳に入らなかった。

階段を上がった先には、細い廊下がまっすぐ伸びていた。両側の壁にずらりとドアが並び、突き当たりでふた股に分かれている。あちこちの部屋から洩れてくる微かな音楽が混じり合い、背中がむずむずするような不協和音を奏でていた。

俺たちは、ドアに記された部屋番号を確かめながら廊下を走り抜けた。二一、二二、二三……。

「あつた！」

宮野が声を上げた。ぴったり閉じたドアにくすんだ金色で記された部屋番号は、二一五。

俺は迷わずドアを開け放った。どっと押し寄せてくる大音量の津波。

カラオケボックスの個室の中では、広い部類に入るであろう部屋には人影が八つ。大学生とおぼしき男が五人、彼らと同じか少し下かという年頃の女が三人。

そこに、彼女が、いた。

突然の乱入者に固まっている他の連中と同じように、茫然と目を瞠っている。肩を竦め、壁に背を押しつけて　まるで、隣の男に追い詰められたように。

彼女の隣に座っていたのは、間違いなくあの高見沢という男だった。

俺は深く長く息を吐き出すと、部屋の中に踏みこんだ。

声にならない声で誰何してくるいくつもの視線を無視して、彼女の前に立つ。さすがに街中へ来たからか、水着の上に見覚えのあるパーカーを羽織っていた。それでも白い胸元やそこから続く腹部は顕で、俺は臍腑が焼け爛れる錯覚を覚えた。

「……………はじめ？」

ぼかんと、そう表現するしかない顔で彼女は呟いた。俺は無言で手を伸ばすと、その細い腕を掴んで立ち上がらせた。

「帰るぞ」

力をこめて手首を握りしめると、彼女はゆっくりと瞬いた。深い色合いの瞳がようやく現状を理解したように、まっすぐ俺を見つめる。

「うん、……………うん」

震える唇を引き結び、最初は小さく、次はもっと大きく頷いた。彼女の体からゆるゆると強張りが解けていく。

「お……………おいおい、ちょっと待ってよ」

高見沢が引きつった笑みを浮かべ、もう一方の彼女の手を掴んだ。彼女の薄い肩がぴくりと跳ねた。

「いきなり入ってきて、それはないんじゃないの？　ってか、きみだれ？　この子は俺らのほうが先約なんだけど」

彼女の肌に触れる男の手。真っ白な半紙が悪意のような墨の色に染まっっていく、そんなおぞましさ。

彼女が、汚れる。

「……手え放せ」

「は？」

「こいつに触んな」

殺意と憎悪が迸る。その毒が一瞬で全身を駆けめぐったように、高見沢の顔から血の気が引いた。

「な、なん……」

高見沢はなんとか口を動かそうとしていたが、どもるだけで言葉になっっていなかった。静かに身の内を蝕んでいく昏い感情の命じるまま、男との距離を詰めかけようとして。

「ちょっとお客さんたち、何してんですか！」

騒々しく駆けこんできた店員の怒鳴り声に、俺は踏みとどまった。店員の登場に驚いたのか、高見沢の手がゆるんだ。俺は素早く彼女の体を引き寄せると、踵を返して宮野に声をかけた。

「宮野、行くぞ」

「ん。ああ」

「……っ、おい、待てよ！」

しつこく食い下がろうとする高見沢を一瞥すると、やつはぐつと押し黙った。盛大な舌打ちのあと、忌々しそうに目を逸らす。

俺は彼女の手を引いて部屋を出た。戸惑いのまなざしを向けてくる店員を無視して、俺たちはカラオケボックスをあとにした。

追いかけてくる者はいなかった。もう彼女に対してどうこうしようとする意志はないのだろう。それならそれでいい。

彼女はずっと黙っていた。俺も何も言わなかった。今はただ、掌

の中の内もりを感じていたかった。生まれたときからそばにあった、これからもそうであってほしいと願うもの。

大切なものを取り戻せた。その事実が、ようやく安堵となって胸を満たす。

手放してしまえば、あっけなくだれかにさらわれてしまう。それが我慢できないのなら、つないだ手を放さなければいい。

なんて簡単で、困難なことなのか。

それでも、俺の答えは決まっている。迷って迷って、遠回りの果てにたどり着いた場所は、すべてのはじまりだった。

だからもう、そこから逃げ出したりなんてしない。世界中のどこを探しても、俺の居場所はただひとつなのだから。

カラオケボックスの看板が乱舞する光に埋没した頃、俺は彼女の手を握り直した。それに応えるように、儂さすら感じる指がしっかりと握り返してくる。

それだけでよかった。それ以上の言葉なんて、なかった。

嵐が過ぎ去った後の静けさは、気が抜けるほど穏やかなものだった。

いつもと同じようできて、確かに何かが変わっている。そんな安心感が滲んだ生ぬるい日々。

台風の間ともいうべき高見沢とは、あれからなんの接触もなかった。一度、砂浜で偶然すれ違ったときも、決まりが悪そうな恨めしそうなまなざしを投げられただけだった。もちろん受け取りなんてしなかったが。

もう彼女にちよっかいを出すつもりがないのなら、眼中に入れる必要などない。だが、もしも二度目をくり返すというのなら 相應の覚悟をしてもらおうではないか。

どうやら俺は、彼女が絡むとどこまでも残酷な人間になれるらしい。そのことに驚きつつも、心のどこかで納得している自分がいた。我ながら呆れるほど他人事めいているが、俺は案外、危うい場所に立っているのかもしれない。一歩踏み外せばどこまでも墮ちていくしかないような、底の見えない闇が覗く断崖絶壁の上に。

そしてその選択を迫られたとき、もしもそうしなければ彼女を失うのだとしたら、俺は簡単に答えを出すだろう。迷いもためらいもなく、あるのはどうしようもない真実だけだから。

ようやく掴んだ揺るぎない確信を噛みしめる俺を、しかし近所のおばちゃんよりも小うるさく目敏い友人たちが放っておくはずがなかった。

「で、いったいいつになったら告白うのかな？」

貴重な休憩時間、俺は呼び出しを食らっていた。ちなみにここは海の家内のバックヤードで、体育館裏ではない。

いつもの胡散臭い笑顔にうつすらと青筋を浮かべ、ちっとも笑っていない目で長谷が凄んでくる。こいつがここまで感情を顕にする

なんて珍しい。

「あれからもう二日だよ？ そろそろいい加減にしてくれないと、さすがに僕の堪忍袋の緒も持たないよ？」

「長谷やん、目が殺気立ってる！ 視線が凶器と化してるから！」  
軽く青ざめた香坂が、俺ににじり寄り寄ってくる長谷を必死に止めようとしている。そんなふたりに、宮野は苦笑いをこぼした。

「俺も同感だな、本原。このままだと砂浜が血の海になりそうだよ」「やーめーてー！ マジで冗談にならないから！ 長谷やんならやりかねないとか思っちゃう自分がおそろしくて悲しい！」

ひいいつと悲鳴を上げる香坂に、俺は肩を竦めてみせた。

「まあ、そのときは尊い犠牲のうえで鎮まっていたたくさ」

「ちよつと待って、なんでそこでおれを見んの。宮野も『あつ、そっか』なんて顔しない！」

「くれるっていうなら、遠慮なく骨の髄までしゃぶらせてもらおうよ？」

「長谷やんも当然とばかりに乗んなーッ！」

魂の底から叫ばんばかりの香坂を、俺は生あたたかい目で眺めずにはいられなかった。日頃の鬱憤を晴らすには、俺よりもなおいじられ役の座を欲しいままにする香坂をいぢめることが一番だ。これこそまさしく香坂クオリティ。

ひととおり麗しき友愛の披露を終えたところで、俺は素直に白状することにした。ここでごまかそうものなら、本当に長谷が刃傷沙汰を起こしかねない。

「ほつとしてふやけてなかったとは言わない。ちよつと感慨にふけってた」

「それでするずる今日までなんの行動も起こさなかった、と？」

「うん……まあ」

長谷はふう、と悩ましげなため息をついた。

「ごめん、宮野。なんか細長くて固いものくれる？」

「殿中で『くれるー！』」

「ご乱心ご乱心つと、おまえがご乱心じゃとツッコみたくなるほど喚く香坂を宥めつつ、宮野は首を横に振った。

「だめだぞ、人殺しは」

「大丈夫。証拠隠滅はきつちりするから」

「おまえなら本当にやり遂げそうだな……」

「どこのどいつのせいだと思ってるのかなあ？」

「い、ひゃい、ひひゃいひひゃい！ ほおひっはんは！」

容赦なく頬をつねり上げられ、俺は降参の意味をこめて犯人の肩を叩いた。

二十秒ほど無視されたのち、ようやく解放される。赤くなつたに違いない頬をさすっていると、もはや長谷の顔からは笑みが消えていた。

「ねえ、本原。ここまで来て逃げるなんて、本当に許さないからね？」

「だれが逃げるかよ」

むっとして言い返すと、長谷は眉間に深々と皺を刻んだ。

「……即答できるくせに土壇場になって気がゆるんじやうって、心底本原らしいよねえ」

「嫌味か」

「褒め言葉だよ？」

ようやく怒りを解いた長谷は、まあやる気は充分みたいだからよしとするよ、と愚痴るように呟いた。

「じゃあ改めて作戦会議といこうか」

「作戦会議？」

いったいなんのと首を傾げる香坂に、長谷は真っ黒な腹の中身を覗かせるような微笑で答えた。

「そりゃあもちろん、神崎女史の攻略法を」

「ぶふっ」

「汚いなあ、いきなり噴き出さないでよ」

「おまえが変なこと言い出すからだろうが！ なんだよ攻略法って

！ しかもなんでおまえら参戦が前提なんだよ！？」

「目には目を、歯には歯を、助っ人には助っ人を、だよ。女子の助力を得た神崎女史にひとりでも勝てるっていうなら、いらないお節介は焼かないけど？」

俺はうぐつと声を詰まらせた。そんな自信、むしろ掃いて捨てられるほどもらいたい。

「果林は優秀だからね。太刀打ちできるのは僕ぐらいだと思っけど？ 水沢女史や丈部女史も、結構容赦ないんじゃないかなあ」

頭を抱えてうづくまりたくなった。そんな俺に尻目に、自称参謀は実に楽しみに宣言する。

「さあ、反撃をはじめようか」

## 9 満開の花火の下で

夜が世界を呑みこんでも、その日は砂浜から人氣が絶えることはなかった。

昼間ほどではないが、細長く伸びた砂浜のあちこちに固まった人影が見える。その多くが波打ち際から離れた場所に陣取って、これから起きることへの期待にざわめいていた。

暗い空に雲は少なく、山吹色の月が威風堂々と輝いている。闇に溶けた波間に月影が落ちて、ゆらゆらとたなびいていた。

微かな潮風に運ばれてくる波の音にまぎらわすように、俺はこっそりとため息をついた。ちらりと隣を盗み見れば、Tシャツにショートパンツという出立ちの彼女が膝を抱えて座りこんでいる。長い髪はいつものようにほどかれたまま、上目がちに前を向いている横顔を撫でるように小さく揺れていた。

俺は彼女と並んで地面に腰を下ろし、両手を後ろについて片膝を立てていた。彼女との距離は、およそ拳ひとつ分。周りに友人たちの姿はなく、近寄ってくる者もない。

つまり、ふたりきり。

これが自称参謀の考え出した『作戦』だった。今夜開かれる花火大会に彼女を誘って告白せよと。

……提案というよりも脅迫に近かったかもしれない。なんだかんだ言いつつ女子も乗り気だったらしく、あれよあれよという間に俺と彼女はこの場に置き去りにされた。こんなときに限って友人たちは見事な連携プレーと手際よさを発揮する。まったくもって器用なことだ。

俺は携帯電話の液晶画面を開き、現在の時刻を確認した。花火の打ち上げがはじまるまであと少し。

この状態になってからすでに十分以上経っているが、未だに会話らしい会話をしていない。何から話せばいいのかわからない、微妙

な沈黙。

いつまでも無言でいるわけにはいかないのだが、うまい言葉が出てこない。口にする前にあれこれ考えてしまい、形になりきらず溶けてしまう。

たぶんここに長谷がいたら間違いなく凶器を持ち出してるよな、と半ば現実逃避めいた考えが脳裏をよぎったとき、

「この前は、ありがと」

不意に、まるで咳くように彼女が口を開いた。

「迎えにきてくれて、ありがと」

「……ああ」

いったいなんのことかと思っただが、すぐに先日のことだとわかった。俺は鮮やかな月を見上げながら、口調を強めて言った。

「我慢できなかったから」

わずかに伏せられていた彼女の視線が浮上し、こちらを向く。俺は今度こそ彼女を見据えた。

「たとえ本気じゃなかったとしても、おまえがだれかの隣にいるなんて我慢できなかった」

彼女はじつと俺の言葉を耳を傾けていた。一言一句聞き漏らすまいとするように。

一度口火を切ってしまったら、あとはするすると言葉が溢れてきた。湧き上がる想いが水泡となって水面から現れ、弾けた瞬間、声となつて響く。

涸れることのない泉から流れ出したものが静かに胸を満たし、指先まで浸透していくようだった。

ああ、俺はこんなにも渴いていたのだ。だから苦しくてたまらなかつた。

ささくれ、ひびわっていた心を潤す感情は全身はめぐり、体の奥底から力となつてこみ上げてくる。

今ならなんだってできる気がした。

人を想うということは、こんなにも、こんなにも。

幸せで、胸がいつぱいになるのだ。

「おまえに試されて、本音を思い知った。俺はおまえが俺以外のやつ隣のいるなんて、いやだ。おまえは俺の隣にいてほしい。おまえの隣にいるのは、俺でありたい」

それ以上なんてない。十全であることを知ったとき、人はだれでも無敵になれる。

何かしたいと願う、その人のために。

「……どうしてそう思うの」

彼女が小さく訊いてくる。震えているような、掠れた声で。

「はじめは、どうしてあたしの隣にいたいって思うの」

波の上に映る月のように揺らぐ双眸が、どうしようもなく愛しかった。

その愛しさのままに、俺は一番伝えたかった言葉を紡いだ。

「おまえのことが、好きだから」

次の瞬間、ドオンと空気が震えた。

彼女の頬が夜目にも赤く染まり、見開かれた瞳のなかに鮮烈な光が映りこむ。ほぼ同時に空を仰ぐと、月にしだれかかるように大輪の花火が咲いた。

赤、青、緑。次々に原色の光が花びらを広げ、月の独壇場だった夜空に美しい模様を織り上げる。

満開の花火。

刹那の艶姿を網膜に残し、目を凝らす間もなく消えていく。

「……あのとき逃げたのは、なんで？」

月を背景に咲き乱れる花火を見上げたまま、彼女が問うてきた。俺は視線を隣に戻した。

「あのとき？」

「あたしの寝こみを襲おうとしてたとき」

少し棘のある声とまなざしが返ってくる。一瞬言葉が詰まりそう

になったが、どうにかため息で押し出した。

「……怖かったんだよ」

情けない限りだが、それが俺の本音だった。

「おまえに拒絶されんのが、怖かったんだ。あんな馬鹿なことして  
いて言えることじゃねえけど」

自嘲せずにはいらなかった。

彼女は 再び黙りこんでしまった。きゅっと唇を引き結び、痛  
いくらいの強さで睨んでくる。ほんの一瞬、花火に染まる瞳が大き  
く震えた。

「ホントに、馬鹿じゃないの」

くしゃりと歪んだ彼女の表情に、俺は思わず息を吸いこんだ。み  
るみる潤んでいく双眸に緊張してしまう。

「なんでそうやって決めつけるのよ。いつあたしがいやだって言っ  
た？ ひとりで勝手に思いこんで逃げ出して、あたしがどれだけ…  
…っ」

とととう溢れた涙が、彼女の頬を流れ落ちる。彼女は膝の上で両  
手を握りしめていた。

「……っ、嬉しかったのに！」

ドオン、とまた花火が上がった。

「そりゃびつくりしたけど、いやじゃなかった。嬉しかったの！」

彼女は飛びこむような勢いで俺の胸を叩いた。反射的に受け止め  
た細い体のやわらかさに、電流が頭のとっぺんまで駆け抜ける。

胸元に顔を埋めた彼女は、本格的にすすり泣きはじめた。くぐも  
った泣き声に合わせて肩が震える。俺のTシャツを掴んで放さない  
手を見て、俺はようやく彼女の背に腕を回した。

「……苑香」

名前を呼ぶと、彼女はますますすがりついてきた。俺は唾を飲み  
下すと、彼女を抱きしめる腕に力をこめた。

「苑香」

潮の香りに混じる彼女の甘いにおい。頭の芯が熱でとろけてしま

いそいで、首筋をくすぐる彼女の髪の毛の感触に、俺はたまらず目を閉じた。

腕の中の彼女が、世界のすべてだった。

「苑香。……顔、上げて」

抱擁をゆるめると、彼女はゆっくりと面を上げた。頬に残っている涙を拭ってやると、喉を鳴らす猫のように目を細める。

……本気で鼻血を噴きそうになった。

幸福感に窒息しそうになりながら、俺は彼女の頬を両手で包みこんだ。ほとんど吐息のような声で訊く。

「キスしてもいいか？」

あの日、臆病で卑怯な俺は勇気が欲しかった。

まっすぐに彼女と向き合う勇気を。想いを告げ、そして彼女の答えを受け止める勇気を。

それは嘘ではなく、だが言い訳に過ぎなかった。

俺があんな馬鹿げた失敗をした理由は、俺が本当に欲しかったものは。

彼女。

俺だけの女王様。

「……今更訊かないでよ」

彼女らしいひねくれた返事に笑ってしまふ。彼女は拗ねたように唇を尖らせたが、やがてゆっくりと瞼を下ろした。

火花が上がるたび、鮮やかな光に彩られる彼女の顔に見とれながら、俺はそつと唇を落とした。

はじめての口づけは、彼女の涙の味がした。

## 10 されど試練の夏は続く

夏の空には、今日も太陽が輝いていた。

光の粒のような飛沫を弾いて笑う人々。砂の上に刻まれた足跡を、打ち寄せる波があつという間に消していく。だが陽気な喧騒は絶えることなく、それどころか熱気となって広がっていくようだった。

もうすっかり見慣れた光景だ。この数日のうちに日常となりつつあるそれが、なぜか愛しい。

ここにいるだれもが同じ時を分かち合い、それぞれの夏を過ごしている。まるでひとつの物語を織り成すたくさんのエピソードのよう。

俺も、彼女も、友人たちも。

「なあににやけてるのかなあ？」

含みを感じる声とともに、長谷が肩に手を置いて顔を覗きこんできた。おまえのほうこそ笑顔がにやにや言ってるぞ、とツッコみたい。

「昨夜の甘〜い逢瀬でも思い出しちゃってるの？ いやらしいなあ、本原つてば」

「違えよ！ なんで断定形なんだよ！？」

「照れない照れない。で、結局どこまでいったの？ まさかキス止まりなんてことはないよね？」

「デリカシーもプライバシーもない質問だな！ 断固黙秘する！」

「うわあ、ABCのAで満足しちゃったの？ やだやだ、これだから初心者は」

「おまえら絶対覗き見してただろーッ！？」

あまりのありえなさに割腹かつぶくしたくなった。だれか、だれか出刃包丁を持ってきてくれ……！

最悪だ最低だ、と地面にめりこむ勢いで落ちこんでいると、ふ、と長谷が軽い吐息を洩らして笑った。

「でもまあ、これでようやく安心できたよ。百点満点にはほど遠いけど、なんだかんだがんばってたと思うよ」

手のかかる教え子を見る教師のような目で、そんなことを言う。鼻の奥がツンとするような切なさがかみ上げてきて、俺はわざとらしく鼻をこすった。

「だれかさんたちにさんざん尻ケツを蹴っ飛ばされたからな」

「そうでもしなきゃ動かないようなヘタレだったからね」

くすりと喉を鳴らす長谷は余裕そのもので、俺は素直に降参した。「……感謝してる」

どんなに馬鹿でも情けなくても見捨てずに、最後まで手を差しのべて背中を押してくれた。

彼らにめぐり会えたことは、俺の人生における最高の幸運のひとつに違いない。

「ありがとな」

長谷はくすぐったそうに目を細めた。

「僕らは、僕らにとつての当たり前のことをしたただだよ。……でも、その気持ちは受け取っておく」

大切にしてくね。

最後に続いた言葉に、俺は力をこめて頷いた。

「ああ」

はつきりと口にはしない。だがそれはまぎれもない、俺と長谷との 彼女を思い、俺を思ってくれる彼らとの約束だった。

「……おや。噂をすればお姫様のお越しだよ」

何かに気づいたらしい長谷に促されて振り返ると、波打ち際からこちらへ向かって駆けてくる彼女の姿があった。

お姫様というよりも、女王様と称するほうがふさわしい 俺の恋人。

そう呼べることが叶えられた、今までもこれからただひとりの、俺の好きな人。

「また水着だけだし……」

「これから苦労するねえ」

肩を叩く長谷の生ぬるい笑みが心に痛い。

「ふたりとも、せつかくの半日休みなのにそんなところで何してんのよ！」

再びポニーテールに結び上げた髪を弾ませながらやってきた彼女は、降り注ぐ陽光よりもまぶしかった。まっすぐ俺の傍らに寄ってきた時点で、頭のねじが二、三本ゆるんだ。

しかし、それでごまかされてはいけない。

「おまえなんで上に羽織ってねえんだよ？ あれだけ注意しただろうが」

「だって海に入んのよ？ 塩水に濡れたら、洗濯してもべたべたになっちゃうもん」

「四の五の言わずに着ろ！ あーもーいい、取ってくる！」

「ちょ、なんでそんなにうるさく言うわけ？ 日焼け止めなら、水に濡れても落ちにくいやつだから大丈夫だってば！」

「そうじゃねええ……っ！」

どこまで鈍感なんだと怒鳴りかけたとき、それまで静観していた長谷がにつこりとたまった。

「神崎女史、神崎女史。本原は妬いてるんだよ。周りの男がみんなきみのこと見てるから」

「ばっ……」

「え？」

俺は一瞬呼吸困難に陥り、彼女はきよとんと目を瞬かせた。言葉を失ったまま硬直した俺に、彼女の大きな瞳が問いかけてくる。

「そうなの？」

ここで頷ける男がいたら、そいつは勇者だと思う。

固まり続ける俺に彼女は瞬きをくり返していたが、やがてにまあつと口の端を持ち上げた。

「そっかあ、そうなんだあ……つまり俺の前だけで着ろってことね？ だったら言ってくればいいのに」

長谷と同種の表情を浮かべた彼女は、凍りついている俺から上着を奪って袖を通した。男物であるためにサイズが合わず、胸元を残して前身頃のチャックを閉めると、まるでそれだけ着ているようだ。これはこれでいい……よくない気がする。

「これでいいでしょ？」

満面の笑顔で小首を傾げ、腕にすり寄ってくる。俺はぎこちなく首を縦に振ろうとして、

「……って、ちょ、苑香さん!？」

「なあに？」

離れようとすればするほど、彼女はますます密着してくる。腕に当たるやわらかい何かかふにやりとたわんだ感触に、俺は総毛立った。

身長差から見下ろす形になってしまふ俺の視線の先には、狙ったかのように上着から覗く彼女の胸元。白い肌に刻まれた影の意味を考えるな……!

彼女は爪先立って俺の耳元に唇を寄せると、息を吹きこむようにささやいた。

「今度はふたりつきりで来ようね。もちろん、お泊まりで」

「ごちそうさま、と呟く長谷の声が遠く聞こえた。

一難去ってまた一難。

どうやら、俺の試練の夏はまだまだ続くようだ。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3335c/>

---

俺と女王様3 青い海と試練の夏

2009年6月30日11時15分発行